

推
し
つ
、
推
さ
れ
つ
。

【登場人物表】

比嘉李里奈（19）May Be Youメンバ

。メンバ | カラー | 緑

吉岡蒼汰（23）李里奈推しのオタク

May Be Youメンバ |

谷上桃花（19）メンバ | カラー | ピンク

吉永鈴（18）メンバ | カラー | 黄色

飯塚瑞樹（22）メンバ | カラー | 赤

木下のぞみ（20）メンバ | カラー | 白

他

坂下恵（42）May Be Youマネージャー

|

藤本洋二（30）鈴推しのオタク

李里奈の母（声のみ）

痴漢男

スタッフ

オタク

○ライブハウス

キャパ500人ほどのライブハウス。

ほぼ満員。

盛り上がっている。

ステージ上にはアイドルグループMa
y B e Y o u（比嘉李里奈（19）、谷

上桃花（19）、吉永鈴（18）飯塚瑞

樹（22）、木下のぞみ（20）。

前列に瑞樹・桃花・のぞみがあり、

後列に凜と李里奈がいる。

客席は桃花・瑞樹・のぞみのメンバー

カラー（ピンク・赤・白）のペンライ

トばかり。

李里奈と鈴のメンバーカラー（緑と黄

色）のペンライトはかなり少数。

瑞樹「では最後はこの曲でいっしょに盛り上

がりましたよ。「後天性プリンス症候群」

メンバーが顔を伏せイントロスタンバ

イ。

全員いっせいに踊りだす。

前列3人は活き活きと歌い踊る。
後方で不機嫌そうに踊る鈴と、笑顔
を張りに付けて踊る李里奈。
李里奈、客席を見渡す。
ちらほらと緑のペンライトも見えるが、
ほとんどが桃花のメンバーカラー（ピ
ンク）のペンライトと合わせて持って
いる。
曲が終わり、決めポーズで停止。
その後、メンバー5人が横一列になり
瑞樹「今日はみんなありがとう！」
メンバー全員、右手を挙げて
5人「May Be Youでした！」
頭を下げたのち、前列メンバーは一人
一人と目を合わせるように手を振りな
がら、鈴は手をふらずそそくさと、李
里奈は全体に向け貼り付けの笑顔で手
を振りながらはけていく。

放心状態の吉岡蒼汰（23）。
手には緑のペンライト一本。
オタクが退場していく中、吉岡のみ立
ち尽くしている。

○日替わり・チエキ会会場・共有スペース

桃花、瑞樹、のぞみのブース前には長
い行列ができている。
ブースから少し離れたところに3人そ
れぞれのオタクが固まっており、自分
のチエキを自慢しあっている。
3人のチエキはポーズやメッセージ書
きがかなり凝っている。

オタク1「桃花近距離で見るとやっぱダント
ツかわいいわ。肌つるつる」

オタク2「いやいや瑞樹だろ。いつもメッセ
ージ丁寧だし」

オタク3「のぞみのこの距離感見てみ。まじ
でぶっ飛ぶ。接触エースはやっぱちがうわ」
オタク1「それに比べて」

オタク3人、鈴ブースを見る。
前には誰もいない。

○同・鈴ブース・中

鈴、あくびをしている。

坂下恵（42）がやってきて

恵「鈴、あくびしない」

鈴「もう終わったしよくないですか」

恵「終わってない。人が来てないだけでしょ。

そういう態度だからもう人がいないんじ

ゃないの？ねえ、聞いてる？」

鈴「だる」

恵「いつまでも子役気分じゃ困るんだからね」

鈴「はあ？」

○同・李里奈ブース・中

鈴の隣ブースにいる李里奈。

漏れ聞こえてくる恵と鈴の言い合いを

聞き流しながら手鏡を取り出しヘアメ

イクを整えている。

恵の声「李里奈を見習いなさい」

鈴の声「どこを」

恵の声「だから……人気なくても腐らずやっ

て……」

鈴の声「え、絶対ああんりたくないんですけ

ど」

鈴、この言葉に反応し髪のをを整える
手をとめる。

恵の声「どうしてそんなこと言うの」

鈴の声「いやだって」

スタッフの声「二人の言い合いを遮るように」

次の方入りまーす」

恵の声「ほら、次だって。ちゃんとやりなさ

いよ」

鈴、わかりやすく溜息。

藤本の声「鈴！ やっほー。また来たよ」

鈴の声「ループかよ、だる」

藤本の声「さっき怒られてなかった？ 坂下だ

っけ。マネージャーの。あの人怖そうだも

んね。鈴が心配」

鈴の声「マネージャーの名前まで知ってるほうが怖いんですけど」

藤本の声「俺はいつでも鈴の味方だよ。鈴はそのままでもいいから。李里奈にも負けてないし」

李里奈、口をへの字にする。

鈴の声「はいはい。で？」

藤本の声「え？」

鈴の声「ポーズは？」

藤本の声「じゃあ鈴のおすすめで！」

李里奈「：：はあ」

スタッツが顔を出す。

スタッツ「次の方入りまーす」

李里奈「あ、はい」

李里奈、姿勢を正し軽く咳払い。

ステージ上と同じ笑顔を作る。

少し間が空き吉岡が入ってくる。

かなり緊張した様子。

吉岡「あ：：」

李里奈「はじめまして：：ですか？」

吉岡「は、あ、はい」

李里奈「わあ！ありがとうございます！お名前聞いていますか」

吉岡「よ、よ、よ吉岡、です」

李里奈「じゃあ、よっしーさんね」

吉岡「あ、うん。あだ名……つけてくれてありがとう」

李里奈「じゃよっしーさん、ポーズどうする？」

吉岡「お任せで」

李里奈「お任せか！うーん……」

李里奈、腕を組み考える。

× × ×

李里奈、無言でチェキにメッセージを書いている。

李里奈「……」

吉岡「……。あ、あの、俺、こういうの来るもの、てかアイドル推すの自体李里奈が初めてで」

李里奈「え、そうなの？うれしい！来てくれてありがとうね！」

とチエキを手渡しする。

吉岡「う、うん」

吉岡、意を決したような表情。

吉岡「あの……その、これからもずっと応援

してます。……ずっと推しです」

スタッフ、吉岡の肩を持ち

スタッフ「はい、お時間でーす」

李里奈、貼り付けた笑顔で両手を振る。

李里奈「ばいばい。ありがとー」

吉岡、照れながら小さく手を振る。

吉岡「……」

吉岡がギリギリまで李里奈のことを見ながら出ていく。

○同・共有スペース

吉岡がチエキを大事そうに持ち、歩いている。

鈴ブースから出てきた藤本洋二（30）

が吉岡に近づき

藤本「ねえ君」

吉岡、気づかずそのまま歩き続ける。

藤本、吉岡の肩をたたく。

藤本「君」

吉岡、驚いて振り返る。

吉岡「えっ！？」

藤本「リュック開いてるよ」

吉岡「あ、すいません」

と、慌ててリュックを閉める。

藤本「手荷物検査の時から空きっぱだったん

じゃない？あるあるだよな。気づけな」

吉岡「はあ」

藤本「初めての人？わかんないことあったら

何でも聞いてよ。誰推しなの？新規ってこ

とは桃花？」

吉岡「あー李里奈です」

藤本「お、渋い。ちなみに俺は鈴推し」

藤本、10枚ほどチエキを見せる。

鈴「今日はこれでおしまい。君は何回転する？」

吉岡「俺はこれだけです」

藤本「まーそっかそっか。初めてだもんね。」

鈴ってさあ、おすすめのポーズって言った
ら全部これなんだよ。ほら、見てよ。今日
の10枚全部同じ。メッセージも同じ。写
る角度も同じ。潔いよね」

チエキを見ると顔の近くで鈴を振るポ
ーズ。

メッセージは全部「たっちゃんさん
この鈴を鳴らすのはアナタ！ R I N」

藤本「カラーコピーかって。だははは。ま
あ、これがいいのよ」

吉岡「：：ストイックっすね」

藤本「鈴オタはストイック、かつDMじゃな
きゃ無理だよ」

吉岡「はあ」

藤本「李里奈はどんなんだっけ」

藤本、吉岡が持つチエキを奪う。

吉岡「あ」

藤本「あー、なるほど。李里奈って感じ。な
んていうか、変なクセがなくていいよね、
李里奈は。だはははは。じゃ」

藤本、チエキを吉岡につき返し満足気に去っていく。

吉岡、藤本の後ろ姿を見送った後、チエキの表面を服の裾で拭く。ほどほどの距離感でダブルピースをしている李里奈と吉岡のチエキ。メッセージは「よっしーさん　ありがとう！また来てね！　りりな」

吉岡「李里奈って感じ、か」と、笑みがこぼれる。

○電車（夜）

李里奈、花柄のワンピース、マスクなしで満員電車に乗っている。SNSでエゴサーチを始める。のぞみと鈴のチエキ比較画像が出ている。のぞみはファンとくつつくくらしい距離感で笑顔。鈴はできるだけ離れて嫌そうな顔をし

鈴ポーズをしている。

「これが接触女王とボトム之差ww」という文章が添えられている。

他の投稿も見る。

桃花と瑞樹のビジュアルを褒めるもの、のぞみの接触対応の良さを褒めるもの、鈴の対応のひどさを晒す物が多く、李里奈の投稿は見当たらない。

李里奈、スマホを閉じ、カバンにしまったところで尻の違和感に気づく。

李里奈「……？」

李里奈の後方にいるサラリーマン風の中年男性がにやにやしながら李里奈の尻を触っている。

李里奈、「最悪」という表情のあと、身をよじって逃げようとするが、身動きが取れず。

李里奈「はあ……」

諦めて立ち尽くしている。

痴漢男、エスカレーターしワンピースの

裾をまくろうと手を掛ける。

吉岡の声「（震える声）やめろ……」

李里奈が振り返ると、痴漢中年男性の腕を吉岡が持っている。

李里奈「え」

痴漢「あ？」

吉岡「やめろって言ってんだろ」

痴漢「はあ？何だ」

吉岡「痴漢です！この人！」

痴漢「は、はあ？言いがかりつけんじゃねえよ」

騒然とする電車内。

乗客がよけ、李里奈、吉岡、痴漢の周りに空間ができる。

吉岡「お前、りりっ……、この子の、お、お尻触ってただろ」

痴漢「はあ？何言ってるんだよ？証拠あんのか」

吉岡「お、俺が、ずっと見てた！」

痴漢「はあ？」

吉岡「……俺が見てたんだよ」

痴漢「うるせーな。それが何の証拠になるんだよ。気色悪い。離せ！」

吉岡「いやだ！」

次の駅到着を知らせるアナウンスが流れる。

吉岡「降りるぞ」

痴漢「降りねえよ」

李里奈「あの……」

吉岡「降りるんだよ！」

電車が停車。
ドアが開く。

吉岡「来い」

痴漢「んだよ」

吉岡「いいから」

吉岡が痴漢男の手をがっちりつかんで電車から引きずりおろす。

李里奈「あ、ちよ」

吉岡と痴漢男を追いかけて李里奈も降りる。

○ホーム

吉岡、痴漢男、李里奈が降り、電車が
去る。

痴漢「しつけーな、離せって」

吉岡「お前何やったかわかってんのか」

痴漢「なんもやってねーって」

吉岡「（痴漢に向かって）俺ずっと見てたか
ら！（李里奈に向かって）見てたから！」

李里奈「え？」

吉岡、李里奈と目があって少しだけ表
情が緩むが顔を背ける。

痴漢「それしかねえのかよ」

吉岡、顔を立て直し痴漢男に向かい

吉岡「ほら！警察行くぞ」

痴漢「行かねえよ！離せ！クソ！」

李里奈「あの」

吉岡、痴漢男を引っ張っていく。

李里奈、吉岡の前に立つ。

吉岡は李里奈の視線から逃げるように

顔を背ける。

李里奈「あの！」

吉岡「へっ」

李里奈「えっと……いいですいいです！大丈夫です！あんま、大事にしたい……ないかも……です」

吉岡「え、でも」

吉岡、痴漢男の腕をつかむ手がゆるむ。

痴漢男、その隙に吉岡の手を振り払う。

痴漢「つたく言いがかりつけやがって」

李里奈「あ」

痴漢男、全速力で逃げ去っていく。

吉岡「あ、おい」

李里奈、ベンチに座る。

李里奈「はあ……こわかった……」

吉岡、李里奈から顔をそらすように無言でその場を離れていく。

吉岡「じゃあ……」

李里奈「あ、あの！」

吉岡「……」

吉岡、振り返らず立ち止まる。

李里奈「あ、ありがとうございます。助けてくれて」

吉岡「いえ……」

吉岡、意を決して振り返る。

李里奈の視線に入るよう顔を見せる。

李里奈、握手会に参加していたオタクだと気づいた様子はなく、じっと見てくる吉岡を不思議そうな顔で見る。

李里奈「ん？」

吉岡「あ……」

李里奈に認知されていないことを察し顔を伏せる。

吉岡「あ……無事でよかったです。あの、でもあいつ逃がしてよかったの？」

李里奈「いいんです。大事になると……ちよつと都合悪くって」

吉岡「そう……か。そうだよ。あ、逆に余計なことしちゃったみたいで……すみません」

李里奈「えっ！いやそんな！本当助かりました。自分ひとりだったら最寄りまであのみま
まずっと我慢するしかなくて。あ！そう
だ！ちゃんとお礼させてください」

吉岡「……」

李里奈「あっお名前……」

と、スマホを取り出そうとカバンを漁
る。

吉岡「……」

吉岡、李里奈がカバンに視線を落とし
たすきに、くりと方向転換し、逃げ
るように去っていく。

李里奈が顔を上げた時には、吉岡は遠
ざかっついていて

李里奈「え？えええ……」

李里奈、がっかりした顔。

○同・李里奈の部屋（夜）

ワンルーム。

洗濯物が部屋干しされていたり、流し

に洗い物が残っていたりとかかなり生活感がある。
李里奈、コンビ二袋を持って帰宅。
着信が鳴る。
ディスプレイには「ママ」の文字。
冷蔵庫に買ったものを収納しながら電話に出る。

李里奈「はい」

母の声（以後沖縄なまり）「李里奈、あんだ元気ね？」

李里奈「（明るい声をつくる）うん、元気元気」

母の声「新しいMV見たよ」

李里奈「あー」

母の声「やっぱしあんだが一番かわいいねえ」

李里奈「いやいやいや……」

母の声「本当本当。ママもパパもおじいもおばあもみーんなあんだが一番だと思ってるよ。歌も踊りも、ビジュ？も」

李里奈「そんなことないんだよ、ママ」

母の声「いや、間違いないね。とにかくみんな

なあんたのこと応援してるから。沖縄の間は全員李里奈推しよー」

李里奈「あははは：：ありがと。じゃ：：ちよつと疲れてるから：：もう切るね。はい」

電話を切る。

しばらくうずくまる。

オンラインハウス

ステージ上。

いつもの立ち位置で、貼り付けた笑顔で踊る李里奈。

ピンク、赤、白のペンライトばかりの中、輝度の高い緑のペンライトが中央あたりに一本ある。

李里奈「あー」

緑のペンライトを持っていたのは吉岡。

李里奈と吉岡、バツチリと目が合う。

李里奈、吉岡と目があつた瞬間、動き

が止まる。

吉岡以外何も見えなくなる。

何も聞こえなくなる。
しばらく見つめ合う。
他のオタクとメンバーは李里奈が止ま
っていることに気を留める様子はない。

吉岡「踊って」

李里奈には吉岡の声のみはつきり聞こ
える。

李里奈、満面の笑みになりこまかくう
なづく。

ダンスを再開。

李里奈と吉岡、見つめ合いっぱなしで
ライブが進む。

吉岡、照れながらもうれしそうにペン
ライトを振っている。

李里奈、吉岡だけに笑顔を向ける。
ファンサービスが過剰。

○バックステージ

メンバーが次々とステージからはけて
くる。

スタッフ「お疲れさまでしたー」

瑞樹・のぞみ・桃花が前を歩き、後ろ

に李里奈と鈴が続く。

瑞樹が振り返り桃花にあわせて歩く。

瑞樹「李里奈！お疲れ」

李里奈「お疲れ」

瑞樹「ねえ、今日すっごい表情よかったよ！

いつもより笑顔が自然だったっていう

か？」

李里奈「え！？：：本当に？」

のぞみも李里奈と瑞樹に合わせ歩く。

のぞみ「うんうん！わかる！私も思った」

瑞樹「ね！めっちゃかわいかったよね！なん

か変えた？」

李里奈「え、いや、特に：：。あ、でも、す

っごい楽しかったかも。うん」

のぞみ「そっかそっか。私たちが楽しいのが

一番だもんね、ファンの人たちにとっても」

李里奈「そう、だね」

桃花、この様子をちらっと見るが、ず

いずいと先に進み楽屋に入っていく。

瑞樹「これからもがんばろ！」

李里奈「……うん、ありがと！」

李里奈、立ち止まる。

瑞樹とのぞみ、李里奈を置いて先を歩
き、楽屋に入っていく。

廊下にひとり取り残された李里奈。

うれしそうな表情。

ガッツポーズをしている。

鈴、立ち止まる李里奈を迷惑そうによ
ける。

鈴「じゃま」

李里奈「え、あ」

と、ガッツポーズをごまかしながら

李里奈「ごめん……あ！鈴も、がんばってね」

鈴「……」

鈴、無視して楽屋に入っていく。

李里奈、小さくもう一度ガッツポーズ
をする。

地味な私服に着替えを済ませた桃花が

楽屋から出てくる。

李里奈、慌ててガッツポーズをごまかす。

桃花、李里奈の横を通る。

桃花「あ、李里奈！お疲れー」

李里奈「お疲れ……。はいね」

桃花「あー、うん。この後ちょっと予定あつてさ」

李里奈「仕事？」

桃花「ううん」

桃花、立ち止まらず李里奈とすれ違ひながら話す。

李里奈、にやけながら

李里奈「え、何？彼氏？」

桃花、ぴたりと立ち止まる。

真顔で李里奈のほうを振り返る。

桃花「そんなわけくない？」

李里奈、桃花の真顔にひるむ

李里奈「……そうだよね、ごめん」

桃花、気まずそうにする李里奈を見て、

アイドルスマイルを作り、ぶりっ子ポーズ。

目は笑っていない。

桃花「（猫なで声）彼氏？ええ？なーに、それ？
ももか、アイドルだからそーゆーのわかん
なーい」

李里奈「（苦笑いで）さすが」

桃花、普通の姿勢としゃべり方に戻る。

桃花「この時間からオフなの久しぶりだから
美容院とかエステとか詰め込んだじゃって、
それで急いでるってだけ」

李里奈「そ…っか」

桃花「じゃ！お疲れ」

李里奈「お疲れ」

桃花、速足で去っていく。

取り残された李里奈。

○コンビニ（夜）

店内放送で M a y B e Y o u の曲がかかっている。

李里奈、部屋着・スッピンで入店して
くる。

BGMを気にする様子はない。

あずきアイス5本と紙パックのお茶1
本を慣れた手つきでかごに入れ、レジ
の列に並ぶ。

有人レジ2台、無人レジ1台に対しフ
ォーク並び。

前にはチヨコミントのバーアイスを3
個手に持った男性（吉岡）がレジ待ち
している。

セルフレジが空いたが男性は動かず。

李里奈「すみません、セルフレジ空いてます
けど……先いいですか」

吉岡「あ、すみません」
と、振り返る。

李里奈「あれっ」

吉岡「……あ」

吉岡、すっと素の顔に戻りセルフレジ
に移動しようと一歩踏み出す。

李里奈「え、ちよっ！」

李里奈、吉岡の腕をつかむ。

吉岡、目を見開き李里奈に捕まれた腕を凝視。

吉岡、逃げようとするが李里奈、手を離さず、にこにこ吉岡の顔を見る。

李里奈、吉岡が持っているチョコミントアイスを奪い自分のかごに入れる。

吉岡「え、いや」

李里奈「ふふふ」

吉岡、李里奈と目を合わせられずおどおどする。

○コンビ二前（夜）

李里奈はあずきアイス、吉岡はチョコミントのアイスを食べている。

二人の間は1mほど距離がある。
李里奈、あずきアイスが硬くて顔をゆ

がませながら食べる。
吉岡、その顔を一瞬見るがすぐにそら

す。

吉岡「あ、あの、本当におごってもらってよ
かったの？」

李里奈「これくらいさせてよ！この前の電車
の件……お礼ちゃんできてなかったし。
あ、そうだ！ライブ来てくれたよね！なん
でなんで！びっくりだよ。そうそう、あの
日のライブさあ、はじめて瑞樹とのぞみに
褒められたんだよ！表情が良かったっ
て！あ、そのお礼も込めてアイスおごった
の。……にしては安すぎるか。あははは」

吉岡「いやあ」

李里奈「ていうかさ、どういうこと？何かし
らでメビユのこと知って、あれ？この子電
車で俺が助けた子じゃね？ライブ行って
みるか！ってなったってこと？」

吉岡「……いや、逆かな。ハマったのはそれ
よりもちよっと前」

李里奈「え、うそ！そっちのがすごくない？
てことは……、推しのアイドルグループの

メンバーを電車で助けたってことか。少女
漫画じゃん！」

吉岡「あ、いや：：たまたま電車乗ってたら
痴漢目撃して、たまたま助けたら、それが
たまたま李里奈だった：：ん、だ」

李里奈「たまたま」

吉岡「：：うん、たまたま」

李里奈「こんなたまたまってあるんだね、す
ごい」

吉岡「：：たまたま、だ、ね」

李里奈「ええ！ありがとうね。すごい助かつ
た。あ、でもさ、李里奈推したのは正直
うそでしょ。緑のペンラ振ってくれてたけ
どさ」

吉岡、急に怒る。

吉岡「そんなわけないじゃん！嘘じゃない
よ！」

李里奈、面食らう。

吉岡「あ、いや：：李里奈推しだよ、電車で
会う前から」

李里奈、笑いをこらえきれず

李里奈「またまたー。あ、たまたまの次はまたまたーだ。あはは。ないない！新規で私のオタクになる人なんていないですよ。桃花から入ったけど、たまたま電車の中で見かけた李里奈が案外かわいかったから推しにしとこつていうだけでしょ。そりゃそうよ、電車でみたらかわいいほうだつて。地元でもかわいいで有名だったんだから。メビユの中じゃそうでもないけどさ」

吉岡「いや本当だつて」

李里奈「本当かなー」

吉岡「誰よりも、：：かわいいし」

李里奈「ええ？あ、ありがと。まあ、そういうことにしておいてやるか。あははは」

李里奈、いたずらっぽい笑顔を吉岡に向ける。

吉岡「李里奈って普段はそういうふうにする

んだね」

李里奈「え？」

吉岡「いや、あ……今日はチョコ、チョコミン
トじゃないの？」

李里奈「え？」

吉岡「好きな食べ物チョコミント味のスイー
ツって……」

李里奈「あー。メンバーカラー緑だし、流行
ってるし。でも本当はあんま好きじゃない
んだよね。歯磨き粉みたいじゃん。しかも
写真で撮るとあんま緑に写らないんだよ。
いつも加工してる。それで、本当に好きな
のはこれ（食べかけで歯形がくつきりつい
ているあずきアイスを指して）あ、内緒だ
よ。一応イメージ商品だからさ」

吉岡「……俺に言っただけなのよ」

李里奈「え」

吉岡「俺もオタクなのに」

李里奈「あ、本当だ。あははは」

吉岡「……」

李里奈「あ、あ！そうだ。一個あげる」

李里奈、ビニール袋の中からあずきア

イスをひとつ吉岡に差し出す。

吉岡「あ、ありがとう」

吉岡、手を伸ばしかけるがひっこめ

吉岡「いや、やっぱいいや」

李里奈「え？どうして？お礼じゃん。おいしいのに」

吉岡「いや、これおごってもらったのでお礼は十分だから。これ以上は」

李里奈「いいからいいから」

吉岡「いいて」

李里奈「あ、もしかしてあずき嫌い？」

吉岡「そんなことはない」

李里奈「チョコミントが好きなの？」

吉岡「：：：そんなことはない」

李里奈「ええ？」

吉岡「これ（自分が持っているチョコミントアイスを指し）がいいんだよ」

李里奈「意味わかんない」

吉岡「李里奈推しだから」

李里奈「え、だから、本当に私が好きなのは

こっちへあずきアイスを指し「だよ」

吉岡「メビユの李里奈はこれへチョコミントを指し」が好きって言った」

李里奈「えっ、まじで意味わかんない」

吉岡「……」

李里奈「もう、後から欲しいって言ってもあげないからね」

と一度出したあずきアイスをビニール袋に戻す。

李里奈「おっと」

李里奈、溶け始めたアイスを急いで食べる。

× × ×

李里奈と吉岡、ゴミ箱にアイスのゴミを捨てる。

吉岡「またライブ行くね」

李里奈「うん、待ってる。ありがとう。お話できてよかった」

吉岡と李里奈、別々の方向に歩いていく。

振り返らずに歩いていく李里奈。
しばらくして吉岡、コンビニに戻って
くる。

ゴミ箱をじっと見つめている。

○マンション・廊下（夜）

李里奈、鍵を開け入ろうとしたところ。
隣の部屋からジャージ姿の鈴が出てく
る。

李里奈「あ、お疲れ。どっか行くの？」

鈴「ジム」

李里奈「今から？えらいね」

鈴「……」

鈴、李里奈を無視して出かけていく。
李里奈、特に気にする様子なく部屋に
入っていく。

○路上（夜）

李里奈の部屋に明かりが灯るのが見え
る。

レッスンスタジオ

May Be Youのメンバー、ダンス
レッスン中。

桃花、李里奈の立ち位置をなおす。

桃花「李里奈、こっち」

李里奈「あ、ごめんごめん」

音楽が止まる。

瑞樹の声「ねえ、いい加減にしなよ」

李里奈、自分のことを言われたのかと
思い、すぐに真顔になる。
声がするほうへ振り返ると、瑞樹が鈴
を怒っている。

瑞樹「やる気ないわけ？なんで振り覚えてき
てないの？」

鈴「いや時間なくて」

瑞樹「時間なかった……？え、時間ないって
何？鈴より仕事あってSNSの更新もマ
メにやっってるうちらちゃんできてるの
にその言い訳通じると思ってる？」

のぞみ、心配そうに見ている。
桃花、気にせず自主練している。

鈴「うっさ」

瑞樹「はあ！？」

のぞみ「瑞樹ちゃん！落ち着いて」

瑞樹「鈴さあ、言いたくないけどどれだけ足引っ張ってるか分かってるの？人気ないからって腐ってても何もなんなくない？何がしたいの？李里奈見てみなよ」

李里奈「え」

瑞樹「李里奈だって、人気ないのにがんばってるじゃん。誰も見てなくてもちゃんとしてるじゃん。それみて鈴は何も思わないの？」

のぞみ「ちよっと瑞樹ちゃん」

のぞみ、李里奈のほうをちらっと見て

瑞樹に合図。

瑞樹、はっとして

瑞樹「あ」

李里奈「……」

瑞樹「李里奈、違う。ごめん……そういう意味じゃ、あの」

李里奈「（作り笑顔で）全然全然」

鈴「私、この人とは違うし。なんで坂下さんも瑞樹ちゃんもこの人と私一緒だと思ってるの！全然ちがうから！」

一同、鈴のほうを見る。

鈴「私は！汚いオタクに媚売って、ひらひら着てダサい歌とダンスするため、事務所に入ったんじゃないし！ここでこんなことやってるの時間の無駄だもん！」

桃花、動きをとめ鈴に近寄る。

桃花「じゃあ、やめたらいいじゃん」

一同、桃花を見る。

桃花「鈴がやめてもうちらは別に困らないし」

鈴「……」

李里奈「桃花」

瑞樹とのぞみ、目を見合わせる。

桃花「鈴に付き合ってるの、私たちだって時間の無駄だし。放っておいて練習しよ」

桃花、立ち位置に戻る。

啞然としている瑞樹とのぞみ。

李里奈、鈴の顔を見る。

鈴、ついに泣き出す。

鈴「やめたいよ。やめたくてしようがないよ。
でもさ、やめてどうしろっていうの！？他
に仕事ないのに！？中卒なのに！？」

桃花「知らないし」

鈴「桃花ちゃんさあ、オーディション落ちた
ことないでしょ。お前は知らない、お前は
ダメだ、なんか違うって言われたことない
でしょ。大人から！」

桃花「……ないよ」

鈴「オーディションで外の大人からダメだ要
らないって言われて、そのあとにお母さん
とか事務所の人とか、近くの大人に「次は
がんばろうね」って言われるの。超がつか
りした顔で！」

一同「……」

鈴「そんなの続けてたら誰だって……誰だ

ってお前が必要って言われたらそこに飛びつくでしょ！飛びついたら、ここだったんだもん。自分がやりたいことと全然ちがかったんだもん！だまされた！やる気なんてあるわけないじゃん！なのに逃げられないじゃん！ここにいてるしかないじゃん！もうどうしたらいいの」

瑞樹「鈴……」

瑞樹、鈴のもとにかけより抱きしめる。

瑞樹「わかったから……うん、わかった」

鈴「わかるわけないじゃん」

瑞樹「うん、ごめんわかんない。でもわかったから」

鈴「なにが……」

のぞみ、瑞樹と鈴に寄り添う。

鈴の嗚咽が続く。

桃花、その場から鈴を見ている。

李里奈、瑞樹・のぞみ・鈴と、桃花の

真ん中あたりでどちらに寄るべきかと、

気まずそうな顔。

○マンション・李里奈の自宅前（朝）

同じタイミングで出てくる李里奈と鈴。

李里奈「あ、おはよ」

鈴「うん」

鈴の手にはゴミ袋・

中にはファンレターの束が入っている。

李里奈「……」

鈴、李里奈の視線に気づき

鈴「……ごめん」

李里奈「……うん」

李里奈と鈴、一緒にエレベーターに乗り下っていく。

○事務所

李里奈・瑞樹・のぞみ・桃花がテーブル

をはさみ座っている。

恵と鈴が入ってくる。

恵は神妙な顔、鈴はすっきりとした顔を
している。

李里奈・瑞樹・のぞみ・桃花「お疲れ様です」

恵「お疲れさま。集まってもらってごめんね。

えーっと……みんなにお話しがあります。

ええ……」

恵、口元をハンカチで抑え、泣くのをこらえている様子。

恵「鈴……鈴は、M a y B e Y o uを卒業します……」

瑞樹・のぞみ「えっ」

李里奈、うつむく。

桃花、まっすぐと鈴を見ている。

恵「じゃ……鈴から説明して」

恵、涙を拭く。

鈴「やつぱりいろいろ考えたけど、ここにずっとしがみついているのどうかなって。逃げられないって思ったけど、やつぱり私はお芝居がしたい。逃げてみる。だから、メビユ卒業する。事務所もやめる。今までありがとう」

恵「（泣きながら）はい……。えっと今後のス

ケジュールだけ……」

恵の説明が続く。

瑞樹とのぞみ、唾然としている。

桃花と李里奈、まっすぐ鈴を見ている。

ライブハウス・中

May Be Youのメンバー、ステージ上に横一列に並んでいる。

客席からすすり泣く声が聞こえる。

鈴「はい」

と鈴が一步前が出る。

鈴「みなさん、今日は私の卒業公演に来てくださってありがとうございます」

鈴が話し出すと客席のペンライトが次々に黄色に変わり、すべてのペンライトが黄色になる。

鈴、その光景を見て

鈴「わあ！すごい！全部黄色。初めて見たー」

客、薄く笑う。

客席の藤本、泣きじゃくっている。

藤本「鈴——」

鈴「え——と、……今まで応援してくださったフアンのみなさん、こんな私を見捨てずに見守ってくれて本当にありがとう。あんまり伝わってなかったかもしれないけどみんなのことちゃんと愛してたよ」

鈴、メンバーのほうを見て

鈴「メンバーのみんな、迷惑ばかりかけちゃったけど……でも、最後はこうやって背中を押してくれて感謝してるよ。ありがとう」

瑞樹・のぞみ、涙を拭く。

鈴、客席のほうを向きなおし

鈴「明日からは、メビユをやめて、事務所もやめて、ただの吉永鈴になります。ゼロからスタートしてこと。時間はかかるかもしれないけど、自分なりに、自分のやり方でお芝居を極めて、また絶対にみなさんの前に帰ってきます。その時まで……待っていてください。……以上、May

B e Y o u の鈴でした」

と言いながら、顔の横で鈴を揺らすポーズ。

曇りのない笑顔。

客席から大きな拍手と歓声。

鈴、深く頭を下げる。

瑞樹・のぞみ、涙を流している。

桃花、自分がかわいく見える角度で拍

手を送っている。

× × ×

ステージ上。

「後天性プリンス症候群」のパフォ

ーマンス。

瑞樹とのぞみ、涙を浮かべながらも笑

顔で鈴とアイコンタクトを取りながら

パフォーマンスしている。

桃花、いつもと変わらず完璧な笑顔と

パフォーマンス。

李里奈、いつも通り笑顔を張り付けて

踊りながらもふと、鈴を見る。

鈴、はじける笑顔とオーラを放ち、これまで鈴とはまるで違う。李里奈、鈴に釘付けになりながら、ぼんやりとパフォーマンスを続ける。

× × ×

客席。

一面黄色のペンライト。
ファン、熱狂している。

藤本、大号泣。

藤本「鈴——っ！鈴——っ！」

○ 一週間後・ライブハウス・中

「後天性プリンス症候群」のパフォー
ーマンス中。

鈴の姿はなくなっている。

メンバーの衣装も変わっている。

フォーメーションは鈴がいた時のまま、
下手後方は不自然に空いている。

瑞樹・のぞみ・桃花、アイドルスマイルで歌い踊る。

李里奈、笑顔を張り付けて上手後方で踊る。

○二週間後・ライブハウス・中

「後天性プリンセス症候群」のパフォ
ーマンス中。

観客、盛り上がっている。

黄色のペンライトは一本もなくなっ
ており、赤・ピンク・白ばかり。

ぽつぽつと緑もあるが、そのほとん
どがピンクと一緒に持たれている。

緑一本だけを持つのは吉岡だけ。

藤本の姿はない。

○三週間後・ライブハウス・中

「後天性プリンセス症候群」のパフォ
ーマンス中。

ステージ上。

曲が終了。

メンバーがまた違う衣装で決めポーズ

で停止している。

鈴の立ち位置はなくなっている。

その後、また横一列に戻る。

瑞樹「ありがとう！っ！」

4人「M a y B e Y o uでした！」

メンバー4人、深く頭を下げた後、手を振りながらはけていく。

○バックステージ

はけてくるメンバー。

前に桃花・瑞樹・のぞみ。

その後から李里奈が続く。

李里奈、ふと振り返る。

誰もいない。

李里奈「……」

○路上（夕）

李里奈と桃花、レッスン着のまま横並

びで歩いている。

李里奈「……あのさ」

桃花「ん？」

李里奈「桃花がさあ、メビユにいる意味って

何？」

桃花「え？」

李里奈「正直さあ、前の鈴みたいに私もなん
でここにいなきゃいけないんだろうって
思うことあるんだよね。かといって私は他
にやりたいことがあるとか、どうしてもア
イドルが嫌とかそんなでもないんだ。そ
うなるといよいよ。で、スーパーアイドル
の桃花はどう考えてるのになって思っ

桃花、ぶりっ子ポーズ。

桃花「スーパーアイドル桃花だよお」

李里奈「（笑いなながら）いいから」

桃花、真顔に戻る。

桃花「……え、ガチで聞いている？」

李里奈「え、うん」

桃花「まじ？」

李里奈「……うん」

桃花「簡単じゃん。みんなを幸せにするため

だよ。アイドルなんだから当たり前。それが、桃花がメビユにいる意味だよ」

李里奈「そんな綺麗ごと」

桃花「李里奈も一緒でしょ」

李里奈「いやあ……」

と、半笑いで桃花の顔をみるとまっ直ぐな目で李里奈を見ていて。

桃花「え、ちがうの？」

○ 駅（夕）

李里奈、ベンチで電車を待っている。

李里奈「はあ」

吉岡、李里奈から5mほど離れたところ立って電車を待っている。

李里奈、吉岡に気づき

李里奈「あ」

李里奈、吉岡に向かって歩いていく。

吉岡、李里奈が近づいてくるに気づき、自然を装って逃げる。

李里奈「ちよっ、おーい」

吉岡「……」

李里奈「なんでいつつも逃げるの」

吉岡「……」

李里奈「ねえって」

李里奈、吉岡の腕をつかむ。

吉岡「……なんでいつも追いかけてくるんだ

よ」

李里奈「……また会ったね、たまたま」

と、笑顔で吉岡の顔を覗き込む。

吉岡「……」

電車が到着。

× × ×

電車が通りすぎると、李里奈と吉岡、

距離を空けベンチに座っている。

李里奈「定時制高校の芸能コース、偏差値知

ってる？」

吉岡「さあ」

李里奈「34」

吉岡「……まじか」

李里奈「私はそこをギリギリで卒業した。

私がメビユやめて芸能界引退しても大した仕事はできないってこと」

吉岡「……うん」

李里奈「私の家族ってさあ、私のことすっごい応援してくれてるんだよ。芸能界への不信感いっさいなし」

吉岡「いい家族だね」

李里奈「いやー、これが結構厄介でさ。逃げて出して帰ったら絶対がっかりされるじゃん」

吉岡「……うん」

李里奈「てなったらやめないほうがいいじゃん。でもこれが、いたほうがいいという理由としてはちよつと弱い。そう思わない？」

吉岡「……」

李里奈「さて李里奈推しのオタクに伺います。私がメビユにいる意味ってなーに？」

李里奈、吉岡にマイクを向けるジェスチャー。

吉岡「……」

李里奈「やっぱ……ない？」

李里奈、腕を下ろす。

吉岡「俺を、俺たちを幸せにしてくれてるか
ら、メビユにいる意味あるって、そう思っ
てほしい、かな」

李里奈「え、桃花と同じこと言うんだ」

吉岡「そんなの当たり前だろ。俺は李里奈が
アイドルになってくれて本当に救われた。
李里奈以上のアイドルはいない」

李里奈「（吹き出し）推しフィルター」

吉岡「推しフィルターなんて何枚もかかって
るよ。オタクだから」

李里奈「……」

吉岡「だから李里奈はメビユにいてよ。李里
奈がメビユにいる意味は、俺……：：：たちを幸
せにすること、ってことじゃ、ダメかな」

李里奈「……私のオタクってめっちゃ少ない
んだよ」

吉岡「少なくとも。ここに確実に一人はいる

から」

李里奈「……」

吉岡「俺一人だけでも幸せにできてるんだから、李里奈は立派なアイドルだよ」

李里奈「……」

吉崎「やめないで。やめちゃダメだ」

李里奈「……」

吉岡「あ、ごめん……ちよっと余計なこと言
いすぎ……？オタクにこんなこと聞いち
やだめだよ」

吉岡、立ち上がり去ろうとする。

李里奈、吉岡の服の裾をつかむ。

吉岡、引っ張られよろける。

吉岡「おっ」

李里奈、うるんだ目で吉岡を見つめる。

李里奈「……す（好きと言おうとして）」

吉岡「ちがう」

李里奈「え」

吉岡「そうじゃない」

李里奈「何が？」

吉岡「李里奈はアイドルで、俺は」

李里奈「そんなの関係ないじゃん。」

吉岡「それ以上になっちゃだめだった」

李里奈「どうして？そんなことない」

吉岡、頭を抱える。

吉岡「はあ……」

電車が到着する。

吉岡「来て」

李里奈「え」

吉岡、電車に乗り込む。

続いて李里奈も乗り込む。

○電車内（夜）

満員電車。

吉岡と李里奈、距離が近い。

李里奈、吉岡を見上げる。

李里奈「どこ行くの？」

吉岡「俺の家」

李里奈「（少しうれしそう）……」

吉岡、李里奈に触れないよう身体をよ

じり、目を合わせないように車窓を眺めていた。

○路上（夜）

吉岡、早歩きで先を歩く。
李里奈、吉岡の手をつかもうと手を伸ばすが、吉岡はポケットに両手をつっこむ。
コンビ二前。
以前李里奈が帰っていった方向に二人で歩く。

○コンビ二（夜）

藤本、窓際のイートインスペースに座っている。
窓の外をぼんやりと見てコーヒ―をすすする。
李里奈と吉岡が通りかかるのが見える。
おもいつきりコーヒ―を噴き出す。

○路上（夜）

藤本、コンビニから飛び出してきて
李里奈と吉岡の後ろ姿を見ている。

藤本「まじか……」

右往左往したのち、後をつける。

× × ×

李里奈、吉岡を追って歩く。

李里奈「ん、え？こつち？」

吉岡「そう」

李里奈「え、でも」

吉岡「こつちなんだよ」

吉岡、戸惑う李里奈を置いてどんどん
進んでいく。

× × ×

隣り合う合うマンションの真ん中に立
つ吉岡と李里奈。

吉岡「こつち」

と李里奈のマンションの向かい側のマ
ンションを指す。

李里奈「ああ」

二人でマンションに入っていく。

○マンション・エレベーター内（夜）

李里奈と吉岡、対角線上に立つ。

李里奈、吉岡の後ろ姿を見つめる。

李里奈「あ、うちもここからすぐ近くなんだ

よ。びっくりだね！」

吉岡「……」

李里奈「あ、たまたまだ。すごい！……たま

たまだらけ」

吉岡「……そんなわけないじゃん」

李里奈「え？」

吉岡「全部知ってるんだって」

エレベーターが停止。

吉岡、降りる。

李里奈、動かず。

吉岡「……やめとく？」

李里奈、首を振り吉岡に続いてエレベ

ーターを出る。

○同・吉岡の部屋（夜）

暗い部屋。

李里奈と吉岡が入ってくる。

吉岡が電気をつける。

1 K の部屋。

壁一面に李里奈の盗撮写真や帰宅経路

を印した地図、電車の時刻表等。

枕元にはジップロックに入ったあずき

アイスのパッケージと棒が2セット。

李里奈、あつけにとられている。

吉岡、ベランダのカーテンを開ける。

真正面に李里奈の部屋のベランダが見

える。

窓の淵に望遠鏡が置いてある。

李里奈「あ」

吉岡「13時からライブがある日は9時12

分の電車に乗る。帰る時間はまちまち、で

も寝る時間は決まって25時。布団シート

は週に1回洗濯する」

と、ずいずいと李里奈に近寄る。

李里奈、後ずさる。

李里奈「えっと……正解」

吉岡「これが俺だよ」

李里奈「どういうこと」

吉岡、あきれたように

吉岡「だから……！全部たまたまじゃないんだって！電車で助けたのもコンビニで会ったのも。李里奈があそこに住んでるって知ってるから俺もここに住んでるんだって！たまたまなんてひとつもないんだって！」

李里奈、吉岡から顔をそらし

李里奈「えっと、なんで」

吉岡「……ストーカーだからだよ。李里奈が好きすぎてわけわからなくなっただけでオタクの域を出た」

李里奈「……」

吉岡「言い訳、聞く？」

李里奈「うん……」

（回想）

○1年前・実家（夜）

子ども部屋。

吉岡、ベッドに寝転がってスマホをいじっている。

吉岡OFF「俺、ずっと優等生でさ。それなりの努力でいい大学出て、結構な大手に就職したんだ。このまま人生うまくやっていたら自けると思ってた。なのに会社に入ったら自分よりもずっと優秀な同期がいて、何も結果を残せなくて。上司からはすぐ期待されなくなっちゃった。それでやっと俺には何もなかったんだって気づいたよ。会社にもいかなくたって、絶望で。母親は会社の悪口言ってた。俺じゃなくて。もう死んでもいいなとも思った」

吉岡、手がすべり顔面にスマホを落とす。

吉岡「……っ！」

スマホの画面にM a y B e Y o u の Y
o u T u b e が流れる。

吉岡、スマホを覗き込む。

吉岡「……」

吉岡OFF「でも生きる意味ができたんだよ」

固い笑顔の李里奈のアップ。

吉岡、一時停止を押す。

李里奈が半目の状態で止まる。

吉岡、吹きだす。

(回想おわり)

李里奈、ベッドに腰掛けコップでお茶
を飲んでいる。

吉岡、李里奈のことをまっすぐに見る。
目には涙がたまっている。

吉岡「それが李里奈。李里奈は俺と同じだと
思った。何も無い」

李里奈「……」

×
×
×

(フラッシュ)

電車の中で痴漢を捕まえる吉岡。

× × ×

吉岡「俺と違うのは、何もなくて腐らず

踊って歌ってることで」

李里奈「……」

× × ×

(フラッシュ)

ステージと客席で見つめ合う李里奈と

吉岡。

× × ×

吉岡「メビユの李里奈が好きで好きで！何も

見逃したくないと思って、気づいたらこれ

だよ」

涙を拭き

吉岡「引くだろ。きもいだろ」

李里奈「そんなこと」

吉岡「はあ！？そんなことあれよ！何なんだ

よ！事務所にチクったほうがいいって。警

察呼びなつて。ていうか……すぐ逃げなつ

て。ばかじゃねえの。何考えてんだよ。何
ストーリーカーが出したお茶とか飲んでるん
だよ！ストーリーカーのベッドに座ってた
よ！」

李里奈「あ、そっか。でも。私は全部ひっく
るめて、あ（言葉につまる）……、そうい
えば……名前……」

吉岡「……こんなことするんじゃないかっ
た。君を知られば知るほど、俺は M a y B e Y o
u の李里奈が好きなんだってわかった。……
……今ここにいる君のことは」

李里奈、吉岡の言葉を最後まで聞かず
いきなりキスする。
吉岡、驚いて目を見開いた後、勢いよ
く李里奈を突き飛ばす。
李里奈、尻もちをつく。

李里奈「いった！」
吉岡、口をぬぐい

吉岡「何やってんだよ！」
李里奈「え……」

吉岡「違うって！そういうんじゃないんだって。偏差値34なだけあるな！」

李里奈「……」

吉岡「なんでそっちから近づいてくるんだ

よ！推しそのまま！M a y B e Y o u の

李里奈のままでいてくれよ！」

と、あずきアイスの入ったジップロックを李里奈に投げつける。

吉岡「好きなままでいさせろよ！」

李里奈「……意味わかんないよ」

李里奈、勢いよく出ていく。

残された吉岡、壁に貼られた写真等を乱暴にはがす。

散らかった部屋でうなだれる。

○マンション外（夜）

李里奈、泣きながら飛び出してきた、向かいのマンションに入っていく。

物陰にいる藤本、溜息。

スマホをスクロールしながら、

藤本「あーあーあー」

スマホの画面には李里奈と吉岡が同じマクションに入っていていく姿の写真。

後方から鈴が駆け寄ってくる。

鈴「たっちゃん？なにやってんの？」

藤本、慌ててスマホをしまう。

藤本「あ、ううん。なにも」

鈴「家先入っててって言ったのに」

藤本「ああ、うん」

鈴「はやくいこ」

と、藤本の腕を組む。

鈴と藤本、マクションに入っていく。

ダンススタジオ

May Be Youのメンバー、各々ス

トレッチをしたり振り確認をしたりし

ている。

李里奈、ストレッチをしているが上の

空。

恵が頭を抱えながら入ってくる。

李里奈以外のメンバーが恵に注目。

恵「李里奈」

李里奈「はい？」

李里奈、ぼけーつとしながら恵のほうを向く。
怖い顔をしている恵にたじろぐ。

○事務所

恵と李里奈、机を挟んで向かい合って座っている。

恵、机の上にスマホを出す。

画面には藤本によって撮影された李里奈と吉岡の写真。

李里奈「あ」

恵「さっきSNSに上がった。で、大炎上。どういうこと？」

李里奈「……」

恵「この人は誰？」

李里奈「……」

恵「何もないの？」

李里奈「何もなくはないです……。でも」

恵「はあ……。彼氏？」

李里奈「彼氏じゃないです。好きな人です。

あ、でも」

恵「家に行ったの？こんな顔むき出しで？マ

スクも帽子も何もなし？」

李里奈「すみません……。行きました。でも」

恵「でもでもでもでって！でももへったくれ

もないのよ」

李里奈「いやでも」

恵「二度と「でも」って言うな」

李里奈「え。でも」

恵「叩くよ」

李里奈「ええ？」

恵「この写真がすべてなの。わかる？」

恵、頭をかかえる。

恵「で、どうすんの？」

李里奈「どうするって」

恵「言っておくけど、うちは恋愛禁止とかじ

やないから。今時そんなことしたら人権侵

害とか言われて世間から叩かれるからね。
ただ、李里奈が男の家に上がり込んでたっ
て知って悲しんだファンは当然いる」

李里奈「……いますかね」

恵「いるはいる。探せばいる。だからバレな
いようにやるのが、エチケツトって話。残
念ながら、男とやることやってるけどみん
な推してねきゆるるん、でアイドルが売れ
るほど日本は進んでない」

李里奈「……」

恵「まあ、どうするかは李里奈に任せる。事
務所としてはあくまでも李里奈自身の選
択だっというテイを取るから」

李里奈「……」

恵「どうする？」

李里奈「どうしたら」

恵「だから、聞いてた？自分で決めて」

李里奈「……」

○レッスンスタジオ

スタッフが李里奈外のメンバーに話をしている。

メンバー全員、体育座りで話を聞くが暗い顔。

李里奈、入ってくると、メンバー全員の視線が集まる。

桃花、静かに立ち上がり李里奈に近づく。

李里奈「桃花：：みんな、ごめ：：」

といいかけた瞬間に桃花、李里奈を思いつきりビンタ。

桃花「ばか」

李里奈「：：ごめん」

○マンション・李里奈の部屋・居間（夕）

コンビニ袋を持った李里奈、帰ってくる。

チョコミントアイス1つとあずきアイ

ス5個、冷凍庫に収納。

スマホに着信。

ディスプレイにはママの文字。

李里奈、電話に出る。

李里奈「はい……」

母の声「李里奈……大丈夫？」

李里奈「（明るい声を作る）うん……大丈夫

夫だよ！全然大丈夫！心配かけてごめん

ね」

母の声「あんた、帰ってきたら？」

李里奈「……え」

母の声「つらかったら帰ってきたらいいのよ」

李里奈「……え。いいの？」

母の声「何言ってるの？いいに決まってるで

しょ」

李里奈「え、でも……あんなに応援してくれ

たのに」

母の声「ママにとってあなたは娘の李里奈な

んだから。M a y B e Y o u の李里奈であ

る以前に」

李里奈、涙を流す。

李里奈「……ありがとう」

電話を切る。

あずきアイスを取り出す。

冷蔵庫によりかかりながらあずきアイスにかじりつくが硬くて噛み切れない。

李里奈 「いぎぎっ……」

李里奈 、うなだれる。

○ 同 ・ 同 ・ 同 (深夜)

真っ暗になっている。

冷蔵庫近くの床で眠っている李里奈。

目を覚ます。

床の上であずきアイスがドロドロに溶けている。

李里奈 、むくつと起き上がる。

○ 同 ・ 同 ・ ベランダ (深夜)

李里奈 、ベランダに出る。

吉岡の部屋はカーテンが閉まっている。
李里奈 、洗濯ばさみを吉岡の部屋のベ

ランダに向かって投げるが届かない。
何個投げても届かない。

李里奈「ねえ……」

李里奈、ベランダ柵に突っ伏せて泣く。
窓の開く音がし、顔を上げると、吉岡
がベランダに出ている。

李里奈「あ……」

吉岡「……どうも」

李里奈「なんで」

吉岡「泣いてるのが見えたから」

李里奈「泣いてないし」

吉岡「ストーカーなめんな」

李里奈と吉岡、薄く笑いあう。

吉岡「……ごめん」

李里奈「それは、何に対して」

吉岡「……Maybe Youの李里奈に傷を

つけて、ごめん」

李里奈「……」

吉岡「あとそれから、こんな押し方してごめ
ん。俺、ここ引っ越すから。もうこんなこ

としないから」

李里奈「……」

吉岡「もうライブにもチエキ会にもいけないけど、それでもメビユの李里奈のことずつと推してる。善良なオタクとして」

李里奈「……戻れるわけないよ。あんな決定的な写真、完全アウトじゃん。何言っても無理でしょ。みんなさ、私のことなんていつもは見向きもしてくれないのに、こんな時だけ寄ってたかって……。もう平気な顔してあの3人の後ろで踊れるわけないでしょ。ママも帰ってきたら言ってくれるし」

吉岡「それでも李里奈は」

李里奈「ねえ一緒に私の地元で暮らすのはどう？だって元通りには戻れない。お互い様でしょ？」

吉岡「……違うよ」

李里奈「お願い」

吉岡「できない……。李里奈は M a y B e Y

o uにいないと」

李里奈「どうして……。私なんかM a y B e
Y o uにいてもいなくて一緒にじゃん。鈴が
いなくなっても、すぐみんな4人のメビユ
に慣れたでしょ。それと同じじゃん！ 4人
が3人になっても、誰も困らない。こんな
ふうには今は炎上して盛り上がってるけど、
私がいなくなればこんなのすぐ忘れれて
赤とピンクと白だけになるの。もともとメ
ビユは3人だったみたい」

吉岡「俺が困るんだよ、M a y B e Y o uの
李里奈がいなくて。傷をつけておいてこん
なこと言うの勝手だってわかってる。でも
いないと困る……。死ぬ」

李里奈「……私も傷ついたんだよ？」

吉岡「……」

李里奈「あんなふうの人に拒絶されたの初め
てだった。傷つけたのM a y B e Y o uの
李里奈だけじゃない」

吉岡「うん、……わかってる」

李里奈「何も思わないの？」

吉岡、大きく息を吐いてから冷静な顔を
を作る。

吉岡「……うん。思わないね」

李里奈「……」

吉岡「May Be Youじゃない李里奈には
興味がない」

李里奈「……どうしても？」

吉岡「どうしても。俺はオタクで、俺の目の
前にいるのはMay Be Youの李里奈。
俺の推し。……それだけ。ストーリーした
のは間違ってた。そっちも……俺に近づい
たのは間違ってた」

李里奈「……間違いない。違う。本当に」
吉岡「……ずっとずっと推すから！死ぬまで
ずっと！いや、死んでもずっと！俺の推し
は李里奈だけだから。何があっても」

李里奈「推し……」

李里奈、しばらく泣きじゃくり、涙と
鼻水で顔がぐしょぐしょ。

李里奈の嗚咽だけが聞こえる。

吉岡、その顔を見ないように目をそらしている。

李里奈、しばらく泣いたのち、涙と鼻水をぬぐう。

李里奈「あのさあ！」

吉岡、李里奈のほうを見る。

李里奈、精一杯のアイドルスマイルをつくっている。

李里奈「いつも応援ありがとう！」

吉岡「……」

李里奈「お名前聞いていいですか？」

吉岡、吹き出した後

吉岡「……吉岡です」

李里奈「じゃあ……よっしーさん」

吉岡「……あだ名、つけてくれて、ありがとう
う」

李里奈「これからも応援よろしくお願いしま
す！じゃあね、バイバイ」

李里奈、両手で手を振る。

吉岡、大きく息を吐き

吉岡「俺の推しになってくれてありがとう。

これからも……よろしく」

李里奈、こみ上げる涙を抑えて笑顔を作り手を振り続ける。

李里奈「またね……！」

吉岡、小さく手を振り部屋に入っ
ていく。

吉岡の部屋のカーテンが閉ざされる。

○同・同・居間（深夜）

李里奈、ベランダから入ってくる。

あずきアイスが床に溶けたまま。

おもいつきり鼻をかんだ後、冷凍庫からチョコミントアイスを取り出して一
気にながつがつと食べる。

○ライブハウス（夜）

ステージ上。

May Be Youのメンバーが神妙な

顔で出てくる。

客席からパラパラと拍手が鳴る。

横一列並ぶ。

瑞樹「ライブの前に、李里奈からみなさんにお伝えしたいことがあります」

李里奈、一歩前が出る。

李里奈「みなさん、いつもM a y B e Y o uを応援してくださりありがとうございます。えー……つと……」

客席から溜息が聞こえてくる。

出ていく客もちらほら。

瑞樹・のぞみがうつむく中、桃花はまつすぐ前を向いている。

李里奈、大きく息を吸い

李里奈「えー……SNSに投稿された私のプライベート写真につきました、お騒がせしてしまい大変申し訳ありません。ファンのみなさまをがっかりさせてしまい……本当にごめんなさい。」

李里奈、目に涙をため、言葉を詰まら

せながら

李里奈「ただあの写真は……あの写真に写っている男性と私は……まったく面識がありません。私はあのマンションに住む女の子のお友達の家遊びに行っただけで、たまたま写真の男性がタイミングよくエントランスにいて、たまたまオートロックを空けてくれたので、たまたま一緒に入らせてもらったっていうだけなんです。その後お礼とちょっとだけ世間話はしましたけど、それ以上のことは何もありません。本当にたまたま。あの場面だけを写真で切り取られると、一緒に部屋に入っていたと思われてもおかしくないですが……これが真実です。全部たまたまです」

ファンたちが疑念の表情。

オタク1「いやー、言い訳苦しすぎ」

オタク2「無理あるだろ、それは」

と首をひねる。

ひとつ、またひとつと緑のペンライト

が他の色に変わっていく。

李里奈「何もなかったとは言え、アイドルという立場でありながら、ファンのみなさんを不安にしてみまうような軽率な行動をとってしまい本当にごめんなさい」

李里奈、頭を深々と下げたあと、顔をあげ一呼吸置いた後

李里奈「迷惑をかけてしまったけど……。勝手だけど、嫌な気持ちになる人もいるかもしれないけど……でも……ここにいさせてください。M a y B e Y o u の李里奈でいさせてください」

李里奈、まっすぐと前を向く。

李里奈「私を推せて幸せだった、そう思い続けてもらえるように、私はここにいますので！これからも、M a y B e Y o u の李里奈の応援、よろしくお願いします」

李里奈、客席を見渡す。

客、全員があきれたような顔。

緑のペンライトを持つ人はもう一人も

いない。

李里奈、深々と頭を下げる。

瑞樹、真顔のまま

瑞樹「どんなことがあつても M a y B e Y o
u は続きます。李里奈を含め、今後ともど
うかよろしくお願いします」

と、言った後頭を下げる。

他メンバーも合わせて頭を下げる。

顔をあげ、間を取った後、瑞樹が笑顔

をつくる。

瑞樹「（明るい声）では、聞いてください！」後

天性プリンス症候群」

会場がざわつく中、メンバーが立ち位

置につく。

顔を伏せスタンバイ。

曲がスタート。

顔を上げると、李里奈、いつも通りの

貼り付けた笑顔。

（了）